グァテマラ国における女性の民族衣装について

引　地　加寿恵

A Study on the Female Folk-Costumes in Guatemala

Kazue Hikichi

1．はじめに

国際化が進み、特に航空機による交通機関の発達や種々のメディアによる情報量の増大にともない、今日では地球上の各地の距離は著しく短縮され、世界各国の交流が盛んに行なわれている。服飾の面でも、例えば、ヨーロッパやアメリカの最新のファッション情報が、正に発表と同時にテレビのブラウン管を通して全世界に伝えられ、我々は居ながらにして流行の最先端を把えることが出来るようになった。当然のことながら、そのような国際化の奔流は、それまで世界各国の様々な民族が永年に渡って築き伝え続けてきた多彩な文化の伝統を押し流し、あるいは圧殺し、大量生産と流通という驚異的な威力によって一様化し、画一化しつつある。

しかしながら、そのような抗い難い時代の趨勢の中にありながらも、世界にはいまだに独自の文化の特徴を根強く保ち続けている民族が幾つかある。ここに取り上げる中米のグァテマラはその貴重な例の一つで、この国に散在する各地のマヤの部族は、近代の大航海時代以降、スペインを中心とする西欧、及び今日のアメリカ等のいわゆる先進資本主義諸国の経済的文化的圧力を受けながらも、古来のマヤの文化の独自性を現在に残している。

もっとも、それは辛うじて守り続けられていると言うべきものかもしれない。例えば、すでに言語はスペイン語がほぼ完全に普及し、人々の間にはカトリック教が浸透している。そして、衣服の面でも、大都会では西洋の服装と何ら変わらず、田舎でも、男性の服装はズボンが一般的である等、伝統の崩壊がかなり進行しているように見受けられる。その点では半世紀ほど前の日本の状態に共通していると思われるが、伝統的な民族衣衣裳が今日でも受け継がれているのは地方の、しかも女性の場合なのである。ここではそのような地方の女性の民族衣裳の中で特に注目に値するものとしてチチカステナンゴ、サンチャゴ・アティトラン、サン・ペドロ・ネクタの３つの地の具体例を取り上げて調べてみたい。

2．チチカステナンゴ（Chichicastenango）

チチカステナンゴは、グァテラマ・シティの西北約100kmに位置する山あいの土地で、かつてはチュギュイラと呼ばれる野であったが、スペインのペドロ・デ・アルバラードがマヤの中でも特に強大な部族の一つであるキチェ（Quiché）族のウタトラン（Utatlán）を攻略した際に、生き残ったキチェ族がこの地に移住し、以来発展して周辺の３万人にも及ぶキチェ族の20を越す村々の中心をなす村となったものである。現在、ここでは木曜日と日曜日に市が立ち、数10kmの遠方からも村人がやってくるため、チチカステナンゴの中心と言える1540年に建てられた聖トマス教会の前面に

広がる大きな広場には〈写真１〉、大勢の人々が集まり、その市場の盛況ぶりを見れば、市の日、そして、遠くの村から山を越えて村人達が正装して行列を作りながら聖トマス教会へと向かう祝日には、ここは村というよりも立派な町の印象である。

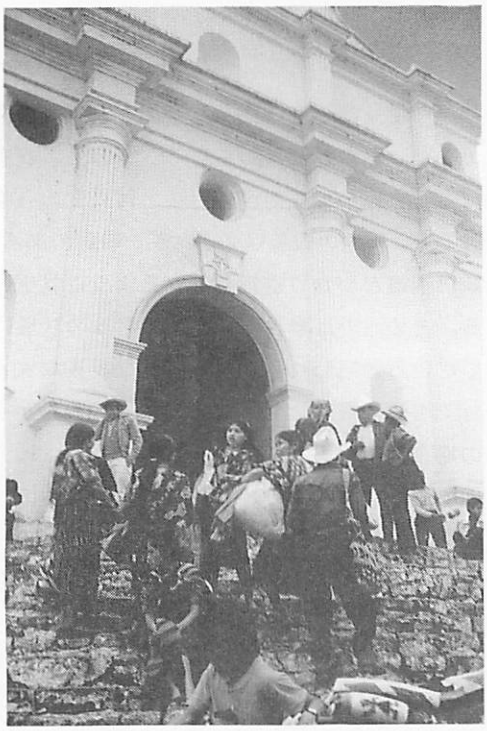

写真１　聖トマス教会

民族衣裳をまとったキチェ族の女性の華やかな姿は、いずれも基本的な色調が共通しているので一見すると同一のようであるが、個々の例を調べると、それぞれ文様の細部は異なっているのがわかる。彼女達の衣裳は上衣のウィピールと、下衣のコルテから成るが、上衣のウィピール（Huipil）は形態上は単純な貫頭衣であり、下衣のコルテ（Corte）は巻きスカート型で、あたかも制服のように揃っている二部式形式である。教会に向かう正装した女性や子供の姿が＜写真２＞であるが、それぞれ着装した上にレボソ（Rebozo）と呼ばれるショールを身につけている。そのレボソの用途は、おしゃれなショールとして使われるのは当然であるが、それ以外にも、子供を背負う背負い布として用い、また前に包んで抱いたり、日射しが強い時には日除けの覆いとされ、あるいはたたんで頭に乗せて頭上に直接陽が当たるのを防ぐ帽子の役割を果たし、時には荷物を包んで運ぶ我が国の風呂敷に相当する道具としても活用され、マヤの血を引く女性にとって、衣服の一部と言うより、欠くことの出来ない身体の一部になっているとも思われるほど大切なものである。＜写真３＞の母子の姿は、レボソを二枚用いており、一枚は子供をくるんで体に括りつけ、もう一枚は頭から被って親子共通の日除けとして用いている。＜写真４＞は、この民族衣裳のウィピールとコルテを着装した姿である。着装して見ると、どっしりとした重量感があり、ゆったりしていて、素肌のままの感触がとても良かったが、首回りの明きは筆者の頭がようやく入る程度で着脱が大変だった。彼女達は細身の体型で、筆者が立って周囲を見渡すと彼女達の頭が眼下にある位の身長なので、約150㎝弱だと思われる。

上衣のウィピールは、綿糸織の布地に十字形の縫取紋様が施された貫頭衣である。構成を調べて見ると、＜図２＞は布丈127㎝、織布幅28㎝の布が中央に、幅23㎝の布が左右に二枚付き、計三枚の接ぎ合せから成り立っていた。＜写真５＞は、三枚接ぎした長方形の一枚の大型布地にしてあり、身幅76㎝、丈127㎝、身丈は63㎝である。接ぎ方は、突き合せ接ぎでしっかり隙間なく、ダブルかがりがしてある。布の中央に首廻り９㎝四方の明きがくり抜かれているので、頭から被る衣服の構成である。その特徴は、裁断せず、布幅一杯に活用して体を包むように着用することである。そして、十字の縫取紋様が肩の部分と前身頃、後身頃の中央に、赤色綿地に多彩な糸を使って豪華にぎっしりと緻密に織り込まれている。この十字の文様

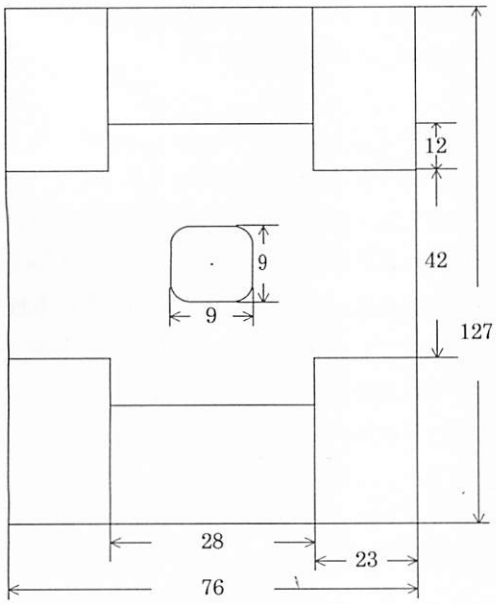

図　2

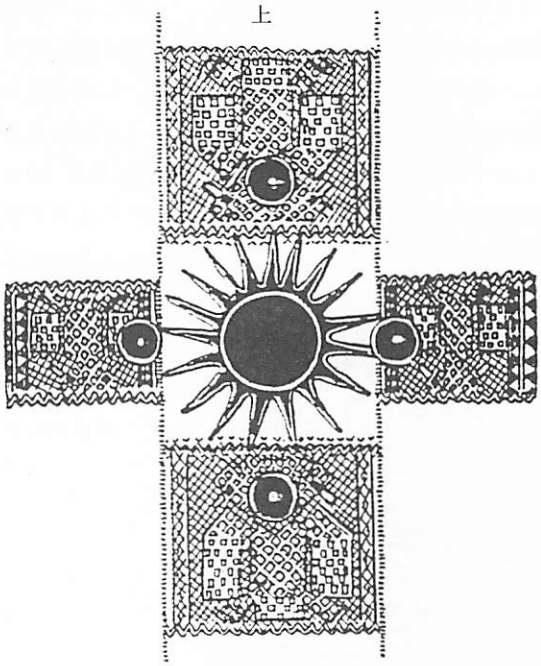

図　1

は永遠の生命の四方位を表わし、首廻りの丸い明きは太陽を表現し、また、首廻りには色綿糸でチェーン・ステッチ、そしてその外側には鋸歯状にキザミ文様が同じように三重に刺してあった。この図柄がキチェ族であることを示しているのである。

この種のウィピールについては、聖トマス教会<写真１>から発見された古代マヤの文化を伝える貴重な書「ポポルブフ（Popolvuh）」においても言及されているが、それによるとウィピールは、着用する人の地位や階級によって素材や文様、基調色、衣服の型や着装が異なっている。例えば<図１>[1]の場合、太陽の周りに描き出されている両肩と体の前後の円形の刺繍は月を表わしたもので、その中心にはヒスイのビーズが付けられている。これらの太陽や月は多産を願う意味を持つと考えられる。縫取紋様の中央のパネルには双頭の鳥のデザインがある。これは、神話や伝説に出て来るコート（Kot）と呼ばれる鳥で、その双頭のそれぞれの表情は同じではなく、二つの顔は善と悪を示すものとして表現されている。

コルテと呼ばれる巻きスカートは、腰巻に相当するものであるが、ここに挙げた<写真４>は、ウール地に平織で縞柄紋様織が細かく施され、高機で織られた正装用である。その構図<図３>のように、コルテの丈は織布幅二幅を接いだ94㎝、身幅は110㎝の形である。総布丈220㎝を二つに折り、輪のように接ぎ合わせたその接ぎ合わせ方は、突き合わせに<写真６>経、緯共に同じくしっか

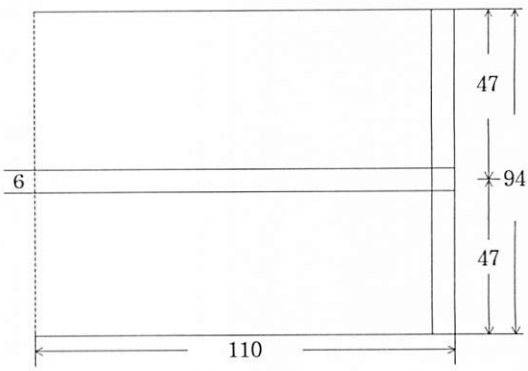

図　3

りと彩色豊かに継ぎ合わされ、一見接ぎ合わされたものとは思えぬ程、あたかも織り出されたように、見事に仕上げられている。一方、日常着には紺絣が用いられるが、これは、現在では高機によるスペインから導入された家内手工業で生産され、どの部族の女性も共通して着用しているようである<写真７>。<図４>はその寸法を示したものである。

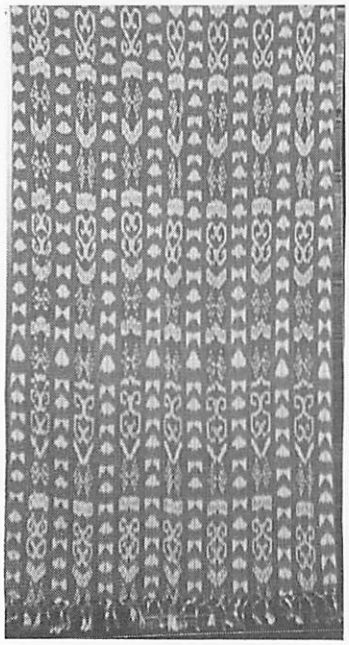

写真７
絣のコルテ

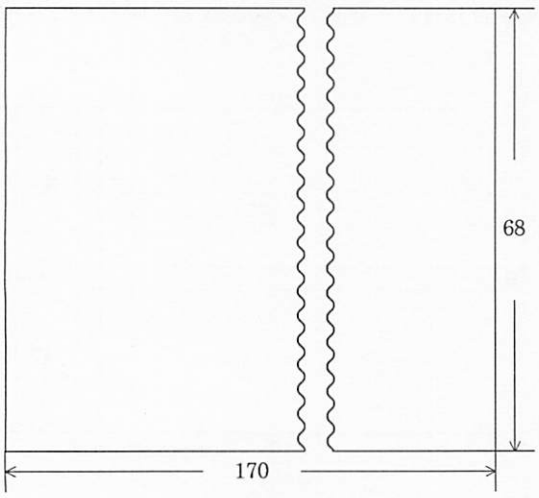

図　4

３．サンティアゴ・アティトラン
(Santiago　Atitlán)

サンティアゴ・アティトランは、グァテマラの中西部、ソロラ（Sololá）の町から南下してアティトラン湖を渡った南岸の小さな入江にのぞむ村で、この村の舟着き場に近い小じんまりした広場では朝市が行なわれ、そこで売買するのは専ら女性である。そして、湖まで頭上に素焼きの壺を乗せて水汲みに行く姿を見てもわかる通り、女性が日常生活では積極的に活動しているのがこのあたりに住むストゥヒル族の特徴であろう。<写真８>、<写真９>では、暑い日射しの下にもかかわらず民族衣裳がいかにも夏向きに涼しげに見えるが、手に取って見ると実際は地厚で強い日射しを遮断し、それをゆったりと風とおし良くすることによって快適に着こなしているのである。

この部族が着用しているウィピールの特徴は、綿糸を用いている点では他の部族と同様だが、緯糸が太く、白地に黒の経縞が織り出されていることである。さらに、縫取紋様が施されているが、その文様に描き出される動物等はウィピールに仕立てられた際、肩山となる位置を上にし、体の前・後共に頭部が上向きになるように対称に作られている。これは、地機（いざり機）の半分まで織り上げたところで、地機の前後を逆に取り付けることによってなされる。その縫取紋様について述べれば、肩山を中心に前身頃、後身頃それぞれ42㎝の範囲に連続紋様が、太い色毛糸を用いて織り出されている。文様の図柄としては、例えば、嘴を寄せ合った一対の鳥（ただし色を変えてある<写真11>）や咲き並んだ色とりどりの花が選ばれているが、こうした図柄や織りは母から娘へと代々伝えられる古い伝統を継承したものである一方、そこには個人の創意も加えられて行き、新しいものは概して柄の大きさが大きく派手に刺されているように見受けられる。<写真13>は、現地の庭

先でいざり機を使って布を織っている母親と娘、子供である。構成の面から見ると、ストゥヒル族のウィピールの用布は<図５>織幅約40㎝、丈170㎝の布二枚から出来ている。織幅二枚を前身頃の中心、後身頃の背中心として接ぎ合わせて作る基本的な貫頭衣である。これを肩山で二つ折りにして身幅が80㎝、丈が85㎝ほどの長方形にする。ちなみにこの部族の成人女性の身長も、普通150㎝弱である。衿は、肩山の位置で接ぎ合せ、頭がゆったり通るように前後計40㎝位あけることによって作られる。袖も腕を通した上、風通しを考慮して左右それぞれ20㎝前後ほど脇を縫い残すことによって出来る。

写真13　織っている母娘

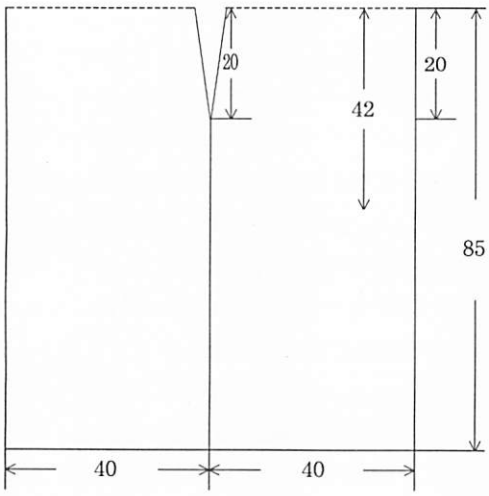

図　5

下半身を覆うコルテ（巻スカート）には、赤や紺の縞織紋様のものを好んで用い、ほぼ脹ら脛を覆うほどの丈で着用していた。布地は、<写真10>の着用例のように、高織縫取紋様、即ち機械織大量生産の商品である。用布は<図６>布幅85㎝、丈270㎝の広幅物を腰に何重にもゆったり巻きつけて着用している。素材は綿糸を使い、織紋様であるので厚地に出来上がっている。

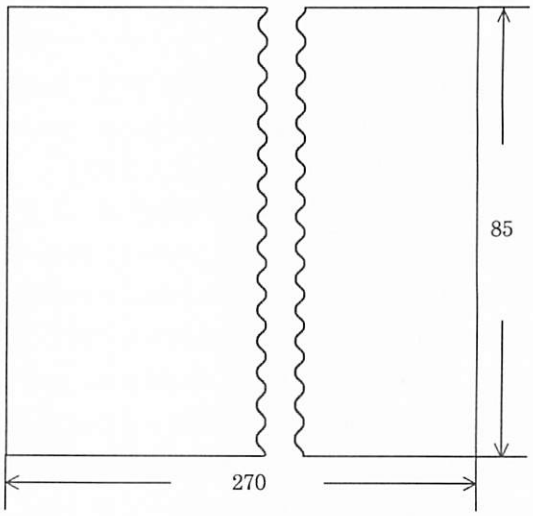

図　6

この部族の女性の服装では、シンタと呼ばれる独特の頭飾りを用いていることが注目される。シンタ（Cinta）とは、スペイン語で帯という意味である。それを頭飾りに用い、長い黒髪の毛の頭部に鮮やかな赤のシンタを巻き付けた姿は一段と女性を美しくし、典雅とも感じられる趣を添え、この部族の特徴となっている。シンタの作りは、長さ12mで（長いものは22mもあり、短いものは通常５m位である）、幅は4.5㎝から５㎝の特別小さな紐織専用の織機で織られている。材料や織り方に関しては、綿糸で赤無地色の手織だが、両先端１m位の間だけは鮮やかに幾何学文様が緻密にしっかりと綴織（表裏が同じ文様に織られている）として施されているのが<写真12>に見られ、

<写真９>の真中に座っている女性の姿は日除けのために被っているもので、綴織の先端には色とりどりの綿糸で作られた12㎝程の房飾りが付き、華やかさを一層引き立てていた。

４．サン・ペドロ・ネクタ（San Pedro Necta）

サン・ペドロ・ネクタは、メキシコ国境に近いサン・マルコス州のチャゴ・チャルテナンゴの山深い傾斜面に住むマム族（Mam）の村である。この部族の衣裳の形態は、やはりウィピールの上衣とコルテの下衣の二部式である<写真14>。ウィピールの構成は、広幅織の52㎝が着丈となっていて、よこ布を使っている。身幅は、織布の総用布丈の160㎝を二つ折りにした80㎝が前身頃、後身頃と同寸のたて布を使った直方形<図７>となる。その著しい特徴は、まず材料の布にあり、一枚の織布の四方が耳端に仕立て上げられている点である。さらに、衣服の構成は、裾の部分は耳端をそのまま用い、身幅の脇の仕末に関しては、一方は輪で腕を通す分だけ16㎝切り明けて袖口とし、他方は同寸の袖口を残して0.2㎝の縫代で縫合してある。後者の腕を通す部分、すなわち袖口は16㎝縫い残すことによって作り出す。両者の明

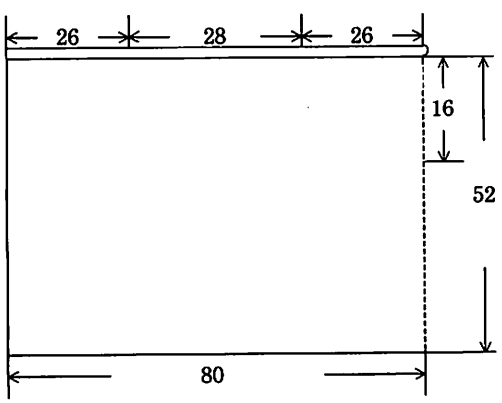

図　7

きの仕末は中に芯を入れ、赤、青、黄、緑の色糸が縞目になるよう0.6㎝の幅でしっかりと密に、巻き縫いされている。衿明きは、前後28㎝直線に明き、腕を通す部分と同様に仕末されている。肩の縫合は、前身頃と後身頃を合わせて肩幅26㎝が、突き合わせ接ぎで、衿に用いられた糸使いと同じように密にしっかりとダブルかがりされている。縁飾は、袖口、肩、衿明き、肩、袖口の順に連なり、あたかもコーディングしたかのように見えるのがこの部族の無駄のない被服構成における苦心の成果となっている。<写真15>の織文様は、白から赤への縞のぼかし色調で織られたものであるが、それは山鳥の羽根を思わせるように美しい。浮織紋様は幾何学紋様で、ウィピールのたて縞のように10㎝間隔で規則正しく並べられている。色や柄が異なっている幾何学紋様は、雨、山、雷、河等、それぞれ自然界の特別な物を表現したもので興味深い。コルテは、インディゴの藍染めの綿布を、自分の手で染め上げ、織ったものを使用している。

山間に住み、他部族との交渉が少ないこの部族の衣服は、乏しい材料をつつましく有効に活用している点が特徴であると言えよう。

以上挙げた三つの部族の衣裳の他に、さらに注目すべき例を一つだけ挙げるならば、イシル（Ix-il）族のものがある。キチェ州に居住するこの部族の織布は、グァテマラの中でも最も文様が大きく、美しい古くからのマヤの伝統をとても良く保っていると考えられ、貴重である。馬、豹、コート、大鳥、人、山等を物語風に具象文様で表わしていて、その豪華な図案は配色にも優れ、どれ一つとっても同じものがないほど表現豊かなものである。その縫取紋様は、刺繍したように見えるが、径糸に10色以上の不規則な稿目になるように緯糸を太くした赤糸で平織に密に織ってある。その上に、さらに隙間なく浮織紋様がはっきりと立体的に織り上げられているのはいかにも見事である。

例えば、<写真16>に見るように、表裏の織りが異り、表は紋様織、裏はたて稿の平織となっている。これはこの国の代表的な織物と言えるものであり、豪華であるにもかかわらず、日常着としてウィピールに仕立て、着用されている。イシル族の例と対照するために他の二部族の参考例を挙げれば、<写真17>はキチェ族の織布地の表裏。<写真18>はポコマム族の織物の表裏である。

5．結び

これらの例を見てみると、織布幅の使い方が一布幅一杯に使ってあるマム族のウィピール、織布幅二枚接ぎ合わせて使ったストゥヒル族のもの、さらには、三枚接ぎ合わせて布を豊富に使って豪華に仕立て上げたキチェ族のもの等、ウィピールの布地の用い方にはそれぞれの部族に特徴がある。また、衿ぐりの形について見ても、キチェ族のくり抜き型、ストゥヒル族のタテ明き、マム族のヨコ明きというように異なっている。それとは別に、これら三部族のどの場合も、織物の紋様や織物の裏の違いから、衣裳をひと目見ただけでいずれの部族であるか識別することが出来るのである。

しかしながら、いずれの場合も外観的な衣服の形態は、ウィピールとコルテという二部式の貫頭衣と腰巻を着用している点では同一であり、構成の上から言っても、布を体型に合わせて裁断することは全くしておらず、突き合わせ接ぎによって合理的に布を活用させて着用しているところが共通している。

また、胴囲りがゆったりしている点も共通しているが、これは通気の上から有効と考えられ、厚地の綿布を共通して着用している点は、保温に効果的であるのは勿論であるが、同時に高原地帯の強い日射しを遮断するのに最適であると思われる。

彼女らは、通例このような衣裳を各自数枚所有しており、肌着なしでもそれらを着換えて用い、寒暖の差はレボソを利用することによって快適に生活してきたのである。

しかしながら、機能的にも吸湿性、保温性や通気性を兼ね備えた上、布地の織り方、文様、衣服の形態、着装方法等によって各部族の特徴を表わすマヤの女性の衣裳も、現状がいつまで続き得るかは疑問である。今日ではすでに化学染料に変ってしまったし、服地の面でも新しい安価な化学繊維がかなり進出しつつある。遠くへの外出には、足に靴やビニールぞうりを履く女性も部族によっては増えてきている。

太古から、自らの手で糸を紡ぎ、染め、その糸で各部族独特の衣裳を織り出してきた技術は、すべて女性のものであり、母から娘へと継承されてきた貴重な文化の宝であったが、グァテマラの気候や風土に合ったその民族衣裳が今後いつまで守り続けられるであろうか。我が国の例と思い合わせた時、社会的、経済的変化により、さらには女性の役割や地位の変化によって、そう遠くない将来、少なくとも日常生活からは消えて行くことも考えられよう。あのグァテマラの高原の風景の中で、咲き乱れる花とも見まがうばかりのマヤの女性の衣裳が、いつまでも日常の現実であることを祈るものである。

註

グアテマラ共和国（República de Guatemala）は、人口およそ850万人、中央アメリカの北部に位置し、北はベリーズ、西はメキシコ、東はホンジュラスとエルサルバドルとに国境を接している。地理的には、太平洋沿岸地帯、中部高原、北部渓谷地帯、ユカタン半島部ペラン地域の４つに分けられ、太平洋沿岸地帯は低地で降水量が多く、中部高原はほぼ東西に走る２つの山脈に挟まれ、人口の多くはここに集中している。北部渓谷地帯はカリブ海に向かって流れる川が深い渓谷を形成し、

ペラン地域は石炭岩からなる低地でほとんどが密林に覆われている、というのが各々の特色である。

気候は、熱帯に属してはいるものの、地形的な多様性からくる温度上の変化に富み、海岸地帯での年平均気温は30度近いが、高原では17度に下がる。また、5月から11月までの雨季と、11月から5月までの乾季があるのも特徴的である。

人口の大部分はマヤ系の原住民及び混血で、公用語はスペイン語だが、キチェ、カクティケル等のマヤ系言語を話す人々もいる。住民の7割近くは農村部に住み、ほとんどがカトリックの信者である。

グァテマラにはもともとマヤ系の原住民が多く住み、彼らは初めユカタン半島に優れたマヤ文化を築いていたが次第に中部高原に進出し、幾つかの小国家を建設した。マヤ文化は、オルメカ文化やサポテカ文化から継承し発展させた独特の神聖文学、精密な天体観測に基づく暦法を持ち、どの文明よりも早く零の概念を創始し、20進法による高度な数学を発達させたことは特筆に値する。

1518年に始まったコルテス（Hernando Cortez 1485－1547）のメキシコ、アステカ征服の波が南下し、1541年にはアンティグア市が建設されてグァテマラ総監領が置かれ、グァテマラはスペインの支配下に入った。1821年、メキシコが帝国として独立するに伴って、グァテマラは同帝国の中米州の1部としてスペインから独立。その後中央アメリカ連合の指導的立場を経て、1838年、独立した主権国家となり、現在に至っているのである。

1）（図1は、Petterson の本による。）

参考資料

C.L. Petterson, Maya of Guatemala. Life and Dress, Ixchel Fextile Museum.(1976)

京都書院　『染織の美　28』(1984)
小川安郎　『民族服飾の生態』東京書籍(1984)
学習研究社　『装飾のデザイン』(1984)
Henri Stierlin; L'art Maya, Office du Livre. (1982)

写真2　女性の民族衣裳

写真3　レボソ着装の母子

写真4　キチェ族

写真6　コルテの接ぎ目

写真5　ウィピール

写真8　アティトラン湖

写真9　ストゥヒル族の市

写真11　一対の鳥の連続紋様

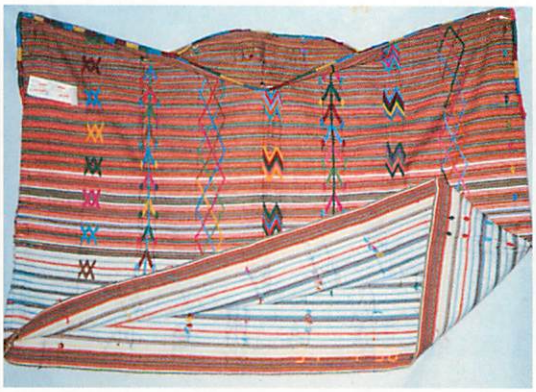

写真15　ウィピール

写真12　シンタ頭飾

写真10　ストゥヒル族

写真14　マム族

写真16　布の表裏

写真17　布の表裏

写真18　布の表裏